

## 「変形体の力学」第1回 演習問題 解答例

### 問題 1

各面の面積を  $\delta S_p (p = 0, 1, 2, 3)$  と書くと、力の  $i$  方向のつりあいの式は、

$$\tilde{f}_i \delta S_0 - t_{ij} \delta S_j = 0 \quad (1)$$

である。ここで、面  $\delta S_j (j = 1, 2, 3)$  はそれぞれ、面  $\delta S_0$  を  $yz$  面、 $zx$  面、 $xy$  面へ射影したものである。したがって、

$$\begin{aligned} \delta S_j &= (\mathbf{n} \cdot \mathbf{e}_j) \delta S_0 \\ &= n_j \delta S_0 \end{aligned}$$

である。これを式 (1) に代入すれば

$$\tilde{f}_i = t_{ij} n_j$$

を得る。

体積力  $K_i$  を考えた場合、三角錐が小さいとすると、つりあいの式は

$$\tilde{f}_i \delta S_0 - t_{ij} \delta S_j + \frac{abc}{6} K_i = 0$$

となる。ここで体積  $0$  の極限を考えるため、

$$a = \varepsilon \alpha, \quad b = \varepsilon \beta, \quad c = \varepsilon \gamma$$

とおいて  $\varepsilon \rightarrow 0$  を考える。このとき三角錐にはたらく力は、応力項が  $O(\varepsilon^2)$  であり、体積力項は  $O(\varepsilon^3)$  である。したがって体積力は高次の微小量であり、無視できる。

### 問題 2

各面で  $z$  軸周りにトルクを生じさせるような力は、

- $x$  軸に垂直な面 + 側 :  $t_{yx} bc \mathbf{e}_y$
- $x$  軸に垂直な面 - 側 :  $-t_{yx} bc \mathbf{e}_y$
- $y$  軸に垂直な面 + 側 :  $t_{xy} ac \mathbf{e}_x$
- $y$  軸に垂直な面 - 側 :  $-t_{xy} ac \mathbf{e}_x$
- $z$  軸に垂直な面 + 側 :  $0$
- $z$  軸に垂直な面 - 側 :  $0$

である。向きと軸からの距離を考え、トルクのつりあいの式をたてると、

$$\begin{aligned} t_{yx} abc - t_{xy} abc &= 0 \\ \therefore t_{yx} &= t_{xy} \end{aligned}$$

となる。

体積力について考える。体積力によるトルク  $T_K$  は、

$$T_K = \iiint (x K_y(\mathbf{r}) - y K_x(\mathbf{r})) dV$$

である。ここで体積力を原点のまわりで展開し、一次のみを考えると、

$$K_i(\mathbf{r}) = K_i(\mathbf{0}) + \left. \frac{\partial K_i}{\partial x_j} \right|_{\mathbf{r}=\mathbf{0}} x_j$$

である。積分を計算すると、

$$T_K = \frac{a^3 bc}{12} \left. \frac{\partial K_y}{\partial x} \right|_{\mathbf{r}=\mathbf{0}} + \frac{ab^3 c}{12} \left. \frac{\partial K_x}{\partial y} \right|_{\mathbf{r}=\mathbf{0}}$$

である。すなわち  $T_K = O(\varepsilon^5)$  である。一方、応力によるトルクは上述のように  $O(\varepsilon^3)$  なので、 $\varepsilon \rightarrow 0$  では応力のみ考えればよい。

### 問題 3

ラグランジュの連続の式

$$\rho(t, \mathbf{r}(t)) \frac{\partial(x(t), y(t), z(t))}{\partial(a, b, c)} = \rho_0$$

について、 $t = 0$  から微小時間  $\delta t$  だけ経過したときを考える。この場合、上式は、

$$\rho(\delta t, \mathbf{r}(\delta t)) \frac{\partial(x(\delta t), y(\delta t), z(\delta t))}{\partial(a, b, c)} = \rho_0 \quad (2)$$

である。一次の微小量までを考えることにすると、

$$\begin{aligned} \rho(\delta t, \mathbf{r}(\delta t)) &= \rho_0 + \frac{D\rho(t)}{Dt} \delta t \\ &= \rho_0 + \delta t \left( \frac{\partial \rho}{\partial t} + v_i \frac{\partial \rho}{\partial x_i} \right) \end{aligned}$$

であり、また、

$$\begin{aligned}\frac{\partial(x(\delta t), y(\delta t), z(\delta t))}{\partial(a, b, c)} &= \det\left(\delta_{ij} + \delta t \frac{\partial v_i}{\partial a_j}\right) \\ &= 1 + \delta t \frac{\partial v_i}{\partial a_i}\end{aligned}$$

となる (det((単位行列)+(微小行列)))。これら  
を式 (2) に代入すると、

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + v_i \frac{\partial \rho}{\partial x_i} + \rho_0 \frac{\partial v_i}{\partial a_i} = 0$$

となる (二次の微小量を無視した)。また、 $x_i(0) = a_i$  なので

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \frac{\partial}{\partial a_i}(\rho v_i) = 0$$

である。ここで  $a_i$  は時間によらない座標であり、  
オイラーの方法での座標に等しい。したがって、

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \operatorname{div}(\rho v) = 0$$

を得る。